

溜池水源と天水その他水源との漸移地帯となっている。

次に利用の実態は次のとおりである。天水その他水源の取水施設は零細で個人に管理され水利組織はない。水の確保状態は出水が豊富かどうかにより集落によって異なるが、一般に用水不足であり節水が行われている。施設・確保状態ともに進歩はほとんどなく、水量の乏しさは生活及び農業経営を大きく制約している。

本地域の溜池の築造は江戸初期に始まり、水田開発に伴って増加した。谷を堰止めた形が大部分で皿池は数えるほどしかない。水利組織は、溜池ごとにその受益者がつくる田子組合が一般的で、水の配分、管理は樋守と呼ばれる水当番に任されている。現在も絶対量の不足はあるが、昔のように干魃に悩まされることは少なくなっている。水

需要の増加は、堰のかさ上げによって対処してきたが、減反等により需要が安定した現在は、圃場整備に伴う溜池の統合など合理的な利用の傾向がみられた。

河川の取水は、井堰と戦後登場したポンプ揚水機によって行われる。水利権は井堰毎に区切られ今も守られており、水利組合がよく発達している。井堰の場合、水の配分規定は特になく水量も豊富である一方、ポンプ揚水はコスト高の上に時間給水で取水は十分ではない。現在、取水施設の進歩により、水量は豊富になった反面、河川の他の水利が盛んで、水田減少の原因となっている。

全体的にみて、減反等による水需要の低下や取水施設の進歩により、水利用は水量の安定化、合理化の方向にある一方、水田の減少率は依然として高く、水田に対する関心は薄れている。

再開発事業にともなう池袋の変容

神 作 晶 子

池袋は膨大な数の乗降客を有するターミナル駅・池袋駅を中核にもつ、日本でも有数の大繁華街である。しかし、かつて池袋は駅の外側に人々が出て来ないため、“奥行きのない街”だと言われていた。その理由には、第二次世界大戦後の繁華街形成の過程における、早い時期からの百貨店の相次ぐ進出が挙げられる。特に東西の駅ビルに開店した西武百貨店、東武百貨店は、駅の乗降客の多くを吸収し、池袋の街の性格を決定づける大きな要因となった。

ところが最近数年間、池袋はこれまでとは明らかに違う方向に変容しつつある。その変容は、1978年にオープンしたサンシャインシティと密接な関係を持つものと考えられる。東口には、駅から650メートルほど離れた場所に、面積約6万平方メートルの東京拘置所跡地があった。跡地は国有地であったが、1967年に民間の株式会社に払い下げられ、当該会社が主体となって再開発事業が計画・実施された。そして、超高層オフィスビル・サンシャイン60を含む大規模な施設が建設されたのである。本論文の目的は池袋の新しい変容の実態を分析し、東京拘置所跡地再開発事業との関

係を明らかにすることである。

研究の方法は、まず路線価格より中心業務地区(CBD)を設定し、サンシャインシティのオープン前と1986年現在の比較分析を行った。調査項目は地価の変化、建築物の高層化、立体的機能分化、土地利用状況の変化などである。さらにCBDの分析によって判明した事象について統計資料、聞き取り調査等をもとにより深い考察を試みた。その結果、次のような結論が得られた。

まず、再開発事業が影響を及ぼしたのは駅の東口側のみであるということである。従来、池袋は全体に飲食・娯楽の性格の強い繁華街で、そのため街のイメージは概して低かった。東口での著しい変容は、イメージの好転となって表われてきている。これに対し、西口では依然として従来の性格が強く、両者の地域差は年々拡大する様子が見られる。

再開発事業の影響を最も直接的に受けたのは60階通りである。全長322メートルのこの通りは、池袋駅からサンシャインシティに至る最短距離のコースに当たり、また再開発事業の一環として道路整備工事が行われたこともあって、人通りが急

激に増加した。1980年代になって大型専門小売店やファーストフードなどのチェーン店が次々と開店し、一層多くの人々を誘引するようになってきている。

この60階通りの変容のゆえに、東口では「奥行きが出てきた」あるいは「街が明るくなった」と言われるが、その他の場所では逆に繁華街が縮小する傾向がみられることも明らかになった。それは地元の小売店の減少となって表われている。全国でも4年ほど前から小規模小売店の減少が始まっているが、池袋東口の商業集積地域においては既に1970年代末頃から始まり、現在も急速な減少が進んでいる。そして、商店の消失した場所に新たに建設されているのがオフィスビルである。

以前、池袋には事務所機能の集積はほとんどみられなかった。それが、サンシャインシティとい

う核が形成されて以来、その周辺に増加しつつある。都心の一等地などと比較すると、池袋に対して企業のもつイメージは依然として低く、その中核管理機能も未熟なものであるといえよう。しかし、交通の要地であることを魅力として池袋に事務所を置く企業は増えており、さらに最近、より駅に近い貸ビルを求めようようになってきている。そのため、これまで繁華街の外郭に主として形成されていた事務所地区が次第に駅に向かって伸張する傾向にある。現在大規模なオフィスビル建設の進んでいるサンシャイン通りがその例として挙げられる。

こういった池袋の新しい変容が顕著になってきたのは、ごく最近になってからである。今後さらに数年の経過を待てば、より明確な結論が得られるものと思われる。

東京区部における宗教的空間構造の変容

木村真冬

神社神道は日本古来の宗教であり、仏教・儒教・キリスト教などの外来宗教と習合しながら発展し、各時代の社会的情勢に応じて変容をとげてきた。が、それぞれの地域社会を守る神（氏神・産土神・鎮守神）を祀るという基本的な性格に変わりはない。神社は人々の空間認識の上で「聖域」とされる地にあり、地域社会の空間構造上の要であった。そこで本論文では東京区部の神社を中核とした空間構造について考察する事とし、事例として江戸の中心域にある神田明神を取上げ、地域社会との関わりを論じた。

一般に住民が聖域とみなすのは集落から間近に見える印象的な山であり、聖域と日常空間との境界に神社が立地すると考えられるが、東京区部の神社は開析谷に臨む台地辺縁部や古荒川、古利根川系河川による沖積低地の自然堤防などの微高地上に分布している。神社の種類としては稲荷・八幡・天祖・氷川神社が多く、また著名神社の勧請伝には源頼朝等の武将が戦場への途上に戦勝祈願し成就したとの型（パターン）が見られるのが特徴的である。

地縁的結合の強くなる中世末から近世頃には、

領主、農民により外から有力神が勧請され、地域全体から崇敬される氏神、地域内部に祀られる神、個々の家の屋敷神、地域を超えた請などの信仰が重層化した。一方人名は城下鎮護のための城を中心とする宗教的空間構造を編成していたと太田道灌に関する神社から推察できる。

江戸の宗教的空間構造は、こうした江戸時代以前の構造の上に成立し、幕府の江戸城、城下町建設、江戸の発展に伴って再編成されていった。東京市史稿の記録をみると江戸城の建設された天正文祿期、拡大した慶長・元和期には城内、城下の神社・寺院が外縁へ移され、明暦大火後にはさらに郭外へと遠心的な移動をしている事がわかる。その結果、江戸城外郭の鬼門の方角に将軍家産土神山王権現と城下総鎮守神田明神が置かれ、周辺地域では鬼門の方面にある台地先端部に増上寺、寛永寺といった重要寺院が配置された。また街道付近を中心に江戸の外縁には寺町が形成された。幕府は自然的条件を生かしながら江戸城を中心とする宗教的空間構造を成立させていったのである。

この空間構造と地域社会との関わりをみるため、東都歳事記に記された神社と氏子地域の分布